

24-21 出羽山 (八王子市城山手1丁目)

地図15

沿革・伝承 『風土記稿』は多磨郡之十五・柚木領下長房村の条で「旧蹟・出羽山」として、由来は不詳だが近辺に近藤出羽守の旧跡があることから、助実の居住地かと推測している。近藤助実は北条氏照の重臣で、天正18年(1590)に八王子城で討死した人物である。

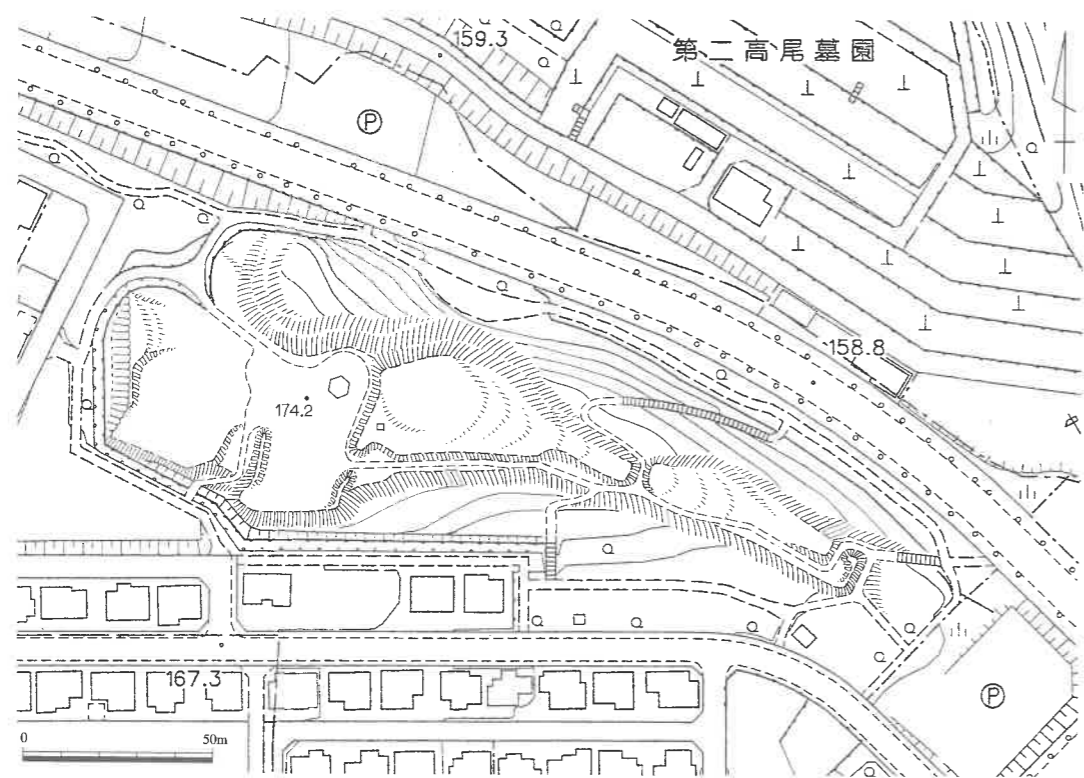
遺構・考察 出羽山は船田丘陵の一角にあり、南北を谷戸に挟まれた緩やかな尾根状の地形を呈する。一帯は1980年代以降、大規模な造成が行われて地形が一変しているが、出羽山については事前調査によって貴重な中世城館遺構が残存しているものと判断され、出羽山公園として保存されている。城跡は現在も雑木林の景観がよく保たれ、調査報告書(註)掲載の図と比較しても目立った相違はない。

曲輪と目されるのは、城地の最高所から西にはずれた60mほどの平坦化された一画で、南側と東側に虎口らしい部分がある。ここから東に下る尾根の中ほどに小さな切通しがあり、堀切のように見受けられる。また尾根先端部にも、道が二

度折れて虎口状を呈する部分がある。出羽山の西側は造成によって失われているが、調査報告書によれば堀切などは存在せず、背後は無防備に開放されていたことになる。

このように、全体として人工的な改変が乏しく遺構も明確ではないが、虎口状の部分は農作業や山仕事に伴う造作としては不自然で、城郭遺構である可能性を否定しきれない。また、助実の伝承を有する場所に遺構が存在することの意味は無視できない。このような城館の性格としては①近藤助実の屋敷、②陣城ないしは阻塞のような臨時築城、の二とおりの可能性が想定できるが、いずれと見るべきかを判断する材料は、現段階では不足している。そうした中で、「出羽山」が大きく損なわれることなく保存されている状況は、今後の調査研究が可能という意味で意義あることといえてよいだろう。

(註)八王子市落越遺跡調査研究会 1982『落越遺跡予備調査報告書』



第38図 出羽山縄張図 (S=1/2000)

24-22 廿里砦 (八王子市廿里町)

地図15

別 名 十里砦、戸取砦、鳥取砦
沿革・伝承 『関八州古戦録』によれば、永禄12年(1569)に武田軍が侵攻した際、小山田信茂の率いる別働隊が郡内から小仏越えで武蔵に侵入し、後北条氏側は横地監物・中山勘解由等が急遽廿里に砦を構えて防戦を試みた。小山田は手勢二百を五隊に分けて攻めかかり、後北条側は三百余が「山際」へ討って出たが、小山田の巧みな用兵に翻弄されて敗退したという。

『風土記稿』多磨郡之十五・柚木領下長房村の条では、「旧蹟」として「十々里原古戦場」を載せており、上記のごとき由緒に続けて「氏照領地の頃は、かねて枳殻樹など植まはして、要害の設ありしともいへり」との伝承を記している。遺構・考察 伝承地は高尾駅北方の丘陵上にあって、南側直下を甲州街道が通過している。一帯は現在、林野庁林業試験場となっていて、立ち入りが制限されている。

掲載した縄張図では、防禦上利用可能な尾根上の平坦地をケバ描きで表現しているが、特に人工

的な曲輪と認められる場所はなく、基本的には自然地形である。今回の調査で確認された明瞭な遺構として、標高237.7m地点と234.1m地点の間の堀切があるが、この堀切は北側斜面にのみ縦堀となっており、234.1m地点から北東に下った北斜面にも縦堀状の地形があるが、城郭遺構と断定できない。

このように、「城郭」としては遺構が散漫でとらえどころがないけれども、白山宮北側背後の標高246.7mの頂部を指揮所とする一種の野戦陣地として考えるならば、理解が可能であろう。

野戦陣地的な阻塞遺構の類例として、近隣地域では神奈川県鴨沢要害(足柄上郡中井町鴨沢)や高麗寺山城(中郡大磯町高麗)を挙げることができる。廿里は甲州口を押さえる要地ではあったが、永禄頃には小仏を越える街道は未整備で、武田軍の大規模な侵攻は想定しにくかったであろう。こうした理解は、軍記の伝える合戦の経過とも符合するものである。



第39図 廿里砦縄張図 (S=1/4000)